
赤い糸

ランデブー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

赤い糸

【Z-コード】

Z9322A

【作者名】

ランデブー

【あらすじ】

僕と妹の千佳はとても仲良し。でも、パパとママの赤い糸が切れちゃつたから千佳とママとお別れなんだ。バイバイなんかしたくないから、僕と千佳は赤い糸をとりに行く事にしたんだ。

(前書き)

この作品は企画小説です。「九月の童話」と検索すれば、他の作者様の素晴らしい作品が見れます! それでは、お楽しみくださいませ。
○(。^*)ノ

僕と妹はとても仲良し。手をつないだりおままでことをしたりプリクラを撮つたり一緒にお風呂に入つたりキスなんかしちゃつたり——皆からは、

「仲良過ぎるんじゃないの？」

って言われるけど、お互い大好きなんだからしようがないじゃん！僕は千佳の事が大好きだし、千佳は僕の事が大好きだしね。

でも、大好きな千佳ともうすぐお別れになっちゃうんだ。パパとママを繋いでいた赤い糸が、切れちゃつたんだって。だからお別れなんだ。また新しい赤い糸を買つたらいいのに、パパもママも買わないんだ！赤い糸が無いから、バイバイしなきゃいけない。ママと千佳と、バイバイしなきゃいけない……。

「ぐすつ……ぐすつ……」

千佳はいつも声を出さずに泣いている。家族がバラバラになっちゃうから、悲しいのかな？

だから僕はいつも、

「千佳。涙をこのハンカチで拭いて」「

千佳を勇気づけるんだ。

「お兄ちゃん……ぐすつ……ありがとう」「

」「リと笑い、僕に抱きついてきた。

「元気になつて良かつた」

僕はホッとして溜息をついた。しかし、

「ぐすつ……ぐすつ……」

また泣いてしまつた。

そうか。あと十分で、千佳はママと一緒にこの家を出ていくんだ。

どうしよう? そのままじゃ、千佳が遠くに行ってしまう。

僕は何かないかなあと思い、部屋を見渡した。

すると、勉強机の上に置いてある田覚まし時計が、光ったようにな

見えた。

「気のせいかなあ?」

そう呟いた僕は千佳の頭を優しく撫でて、田覚まし時計を右手で持つた。

「お兄ちゃん、何してるの? 電池ないの?」

千佳は真っ赤になつた田で、僕の隣に歩いてきた。

「気のせいだと思つたけど、この田覚まし時計がむき光つたんだよね

「えつ? ソレほんと?」

「気のせいだと思つたけど

「もしほんとだつたら、この田覚まし時計は『不思議な時計』だよ!

「不思議な時計?」

「不思議な時計っていうのは、長針を動かすと過去に戻れたり未来へ行けたりするの! 有名な話だけど、お兄ちゃん知らないの?」

「その話、本当なの?」

「それは分からない……」

「じゃあ調べてみよ!」

僕は裏側を自分の方に向けて、長針を少し動かした。田覚まし時

計は、12時45分になつた。

確認の為、壁掛け時計を見る。壁掛け時計は、12時45分と指していた。

「スゴいよ! 私達、過去の世界に来ちゃつた!」

「そうだね。五分前だけどね」

僕は、パパとママが仲直りするには赤い糸しかないと思い、千佳が生まれた頃まで長針を動かした。

1日で1周だから、1年だと365周、10年だと3650周……疲れたけど、家族がバラバラにならない為だから我慢しよう！

10年前の僕の部屋はお婆ちゃんの部屋だった。建て替える前の家は覚えていないので、興味があつたりする。しかし、誰かに見つかる前に赤い糸を探さないとイケないので、足音をたてずに進む。

『オギヤーオギヤー』

一階から、赤ちゃんの泣き声が聞こえてきた。

『この泣き声は千佳かな？僕は泣き虫じやないしね。

『はいはい、ミルクでちゅよ～。もう圭太はお兄ちゃんなんだから、妹の千佳ちゃんより泣かないでね。妹より泣き虫のお兄ちゃんなんて、嫌われちゃうや～』 10年前のママが言つた。

泣き声は、僕だったようだ。何で今とは逆なんだろうと思つた。今は千佳が泣き虫で、昔は僕が泣き虫……ひょつとして、僕の泣き虫が千佳に風邪のようにつつたのかな？

『オギヤーオギヤー』

また、僕の泣き声が聞こえてきた。多分だけど、妹の千佳ママがとられたと思って、泣いてるんだと思つ。

『おいで圭太。お前は長男だから妹を守つてあげないとイケないの、このままじゃお前が妹に守られるかもしないぞ？』

10年前のパパが言った。

「ねえねえ。何で、私が生まれた頃に来たの？」
千佳は、誰かにバレないようになんか小さなかまくらで話す。

「お婆ちゃんが言つていたんだ。パパとママが千佳が生まれた頃、赤い糸をお互いの小指に結んで幸せに暮らしていくことを決めたのを。昔のパパとママは、今と違つて仲良しでしょう？ 多分、赤い糸で結ばれてるからだと思つんだ。だから、赤い糸をとつこきたんだ！」

僕も、誰かにバレないようになんか小さなかまくらで話す。

「じゃあ、早く赤い糸を見つけて2006年に帰らつー。」「うん」

赤い糸は、パパとママの寝室にあった。

お婆ちゃんが言つていた通り、タンスの一番下に赤い糸はあった。

「よしー、帰らつー」

僕は千佳の右手をギュッと握り、お婆ちゃんの部屋へと向かう。
一步一步慎重に歩く。

そして、お婆ちゃんの部屋につくと急いで田舎まし時計の長針を、10年後まで進めるーー。

田の前が眩しく光つて、少しずつ視界が開ける。気がつくと、僕と千佳はベッドの上に横になっていた。

「戻ってきたんだ。2006年に……」

「そうだね

僕は右手に持っている赤い糸を強く握って、千佳の頭を優しく撫でる。

『圭太！ 千佳！ 何処に行つたんだ！』

一階から、お父さんの大きな声が聞こえてきた。
僕達を探してゐみたい。

『二人とも！ 隠れてないで出てきなさい！』

今度は、お母さんの大きな声が聞こえてきた。

僕は時計を見た——。

1時20分と指している。

「過去や未来に行つてゐる時間だけ、現代の時間も進むんだった……」

千佳は言つ。

「かえつてこの状況は僕達に有利になつたと思つよ」
僕は言つ。

一階に降りた僕達。

「今まで何処に行つてたんだ？　お前達が突然いなくなつたから、心配したじゃないか！」

「よかつた……一人とも無事で。一人が何処かに行つたと思って、心配したのよ……」

パパもママも、僕と千佳の事を心配している。

「さあ、一人が見つかったしそうぞお別れだ。圭太、千佳にバイバイをしなさい。千佳、ママの言つ事をよく聞くよう」「千佳、荷物を持つてね。パパと圭太とお別れだから、ハグでもしない。それと圭太は、パパの言つ事をちゃんと聞きなさいよ」

でも、パパとママの赤い糸は切れちゃつてる。

僕達の気持ちをちゃんとパパとママに伝えないと、アトで後悔すると思つから言つだけ言ってみるんだ！

「嫌だよー。千佳とママとお別れなんて嫌だよー。」「お兄ちゃん」とパパと、バイバイなんかしたくない

「何言つてるんだ？　もう離婚したんだぞ」

「悲しいかもしぬないけど一度と会えないわけじゃないから、分かってくれない？」

二人の言っている事なんて耳には入ってこなくて、僕と千佳はパパとママの小指に赤い糸を結んだ。

「……コレって

「あの赤い糸？」

パパとママは、暫らく無言のまま見つめあった。

そして、一人は声を出さずに泣きだした。

涙をフローリングの床にポタポタと落とし、泣いている、

「その……、ゴメンな。怒鳴つたりして「
私も、ぶつたりしてごめんなさい」

二人の距離は、少しずつ近くなる。

赤い糸はピンと張っていたが、少しずつたるむ。

「わっ！」

僕は、皿をつむった。

「パパとママ、ラブラブだあ～

千佳は、楽しんでいる。

パパとママは、仲直りのキスをしているーー。

（後書き）

最後まで読んでくれて、ありがとうございます（—）童話つていうのが結局何が分からないまま、書きました。僕は童話とは、「子供でも読める読み物」と思っています。なので難しい文字は使いませんでした。よければ、御感想を書いてくれませんか？後書きまで読んで頂いたので。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9322a/>

赤い糸

2010年10月9日20時23分発行